Ⅲ．成果報告会

文部科学省事業
令和３年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」

成果報告会プログラム

日時：2021 年 12 月 14 日　13：30～15：30

・挨拶

・学習プログラム成果報告
　Ⅰ　「ボッチャ」を通しての学びの場づくり 2021
　　① 経過報告
　　② ボッチャ大会に参加して…大会に参加した当事者より
　　③ ボッチャ大会参加がもたらしたもの…大会に参加した障害福祉事業所職員より
　　④ アンケート結果報告

・休憩（５分）

・学習プログラム成果報告
　Ⅱ　「障がい者の青年学級」による学びの場づくり
　　① 視察研修報告１
　　② 視察研修報告２

・講演「障がい者が学び続けるということ～生涯学習を権利として～」
　…田中良三（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授）

参加人数　29名

文部科学省事業

令和3年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」
成果報告会

瀬戸市とNPO法人杏(障害福祉事業所)が、令和3年度から障害者の生涯学習機会を整備する事業を始めました。

事業の説明や、今年度実施したことなどの報告会を開催します！

今年度はボッチャに関するイベントを開催しました！

日時　2021.12/14（火）
13:30～15:30

場所　デジタルリサーチパークセンター
マルチメディア電子会議室

対象　公民館職員／障害福祉事業所職員／さくらんぼステーション／連携協議会委員

形式　対面（50名）およびZOOM（ID:954 2130 1483　パスコード:880028）
※ZOOM参加の方は、時間になりましたら入室してください

主なプログラム

13：30	開会のあいさつ
13：40	学習プログラム成果報告 Ⅰ「ボッチャ」を通しての学びの場づくり2021 ・事業説明と経過報告 ・ボッチャ大会に参加して ・ボッチャ大会参加がもたらしたもの Ⅱ「障がい者の青年学級」による学びの場づくり　視察研修報告
15：00	講演「障がい者が学び続けるということ～生涯学習を権利として～」 田中良三（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授）

主催／NPO法人杏　　共催／瀬戸市・瀬戸市教育委員会

令和3年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」

「ボッチャ」を通しての学びの場づくり2021
経過報告

令和3年12月14日（火）
成　果　報　告　会

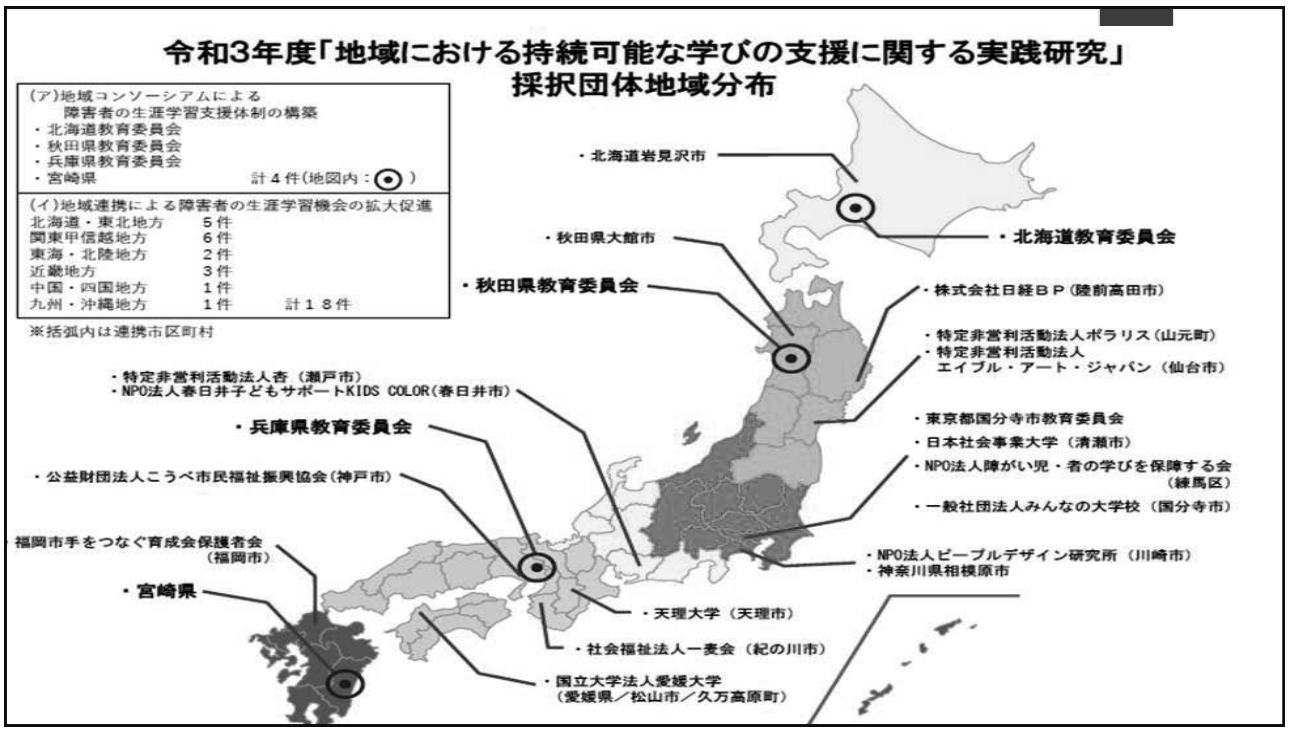
平成２６年の障害者権利条約の批准
平成２８年の障害者差別解消法の施行

- 障害者が生涯を通じて学び続けられる社会、共に学び、生きる共生社会の実現
- 学校卒業後も教育や文化、スポーツなどの様々な機会に親しむことができるよう、社会全体で支援していくことが重要

文部科学省による公募　令和3年～

▶ 学校卒業後の障害者の社会参加・活躍を一層推進するため、市区町村が民間団体等と組織的に連携した生涯学習プログラムを開発・実施し、成果を全国に普及することを目的に「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を公募

瀬戸市の障害福祉事業所　「NPO法人　杏」
就労継続支援Ｂ型



事業名
「瀬戸市における民間団体との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」

- きっかけ
- 愛知県立大学名誉教授、愛知みずほ短期大学特任教授　田中良三先生
- H29文部科学省有識者メンバー　長年、瀬戸市の障害児教育・保育、福祉に貢献
- 平成30年から令和2年までの3年間
- 田中先生が立ち上げられた「見晴台学園」「見晴台学園大学」等の事業体が集まった「NPO法人　学習障害児・者の教育と自立の保証をすすめる会」が文部科学省の委託事業　受託
- この事業に瀬戸市教育委員会、瀬戸市の（株）ジョブウェルが関わる

3年間で私が考えたこと

- 障害のある方こそ、高等部卒業後に急いで社会に出るのではなく、学びたいという気持ちがあれば、学ぶことができる場が必要である
- 私が担任をした特別支援学級の卒業生たちの中で、いきいきと働いている方は、学校卒業後もスポーツに励んでいたり、趣味をもって社会とつながっていたりしており、余暇活動を含む生涯学習を充実させている。それぞれのライフステージで夢と希望をもって生きていけるよう、生涯にわたる学習活動の充実を目指すべきである

瀬戸市において何ができるか

▶「連携協議会」

▶障害者の学校卒業後に関わる行政内の横の連携をはじめ、公民館や自立支援委員会、障害福祉事業所など行政と民間団体との連携の広がりと協働が必要

▶効果的な学習を提供するための実施体制、関係部局・民間団体等との連携体制を構築

ボッチャを柱とした実際の取り組み

▶既に市内の学校で盛んに行われているボッチャ

▶地域においてボッチャができる場を整備し、学校卒業後も障害者が活動する機会の提供

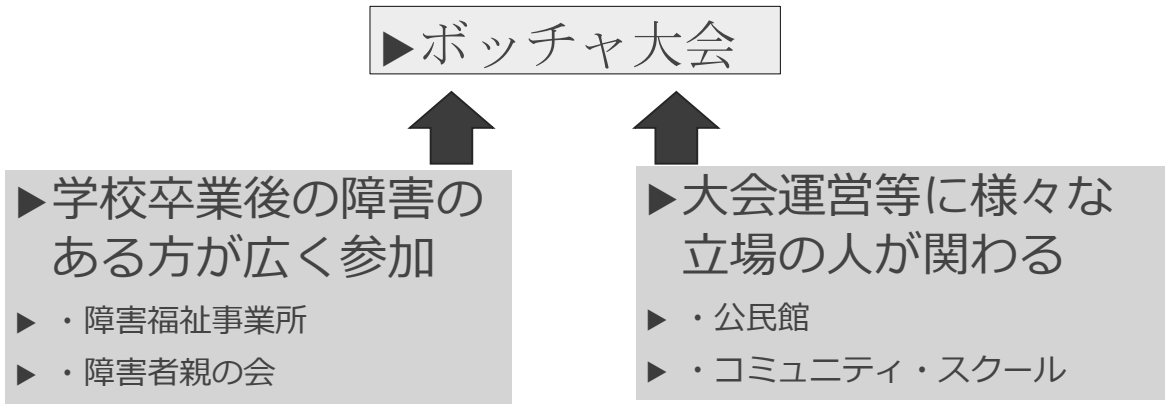
▶地域住民がボッチャを通じて一緒になって活動できる場の整備

▶地域への障害理解を深める

ボッチャを柱とした実際の取り組み

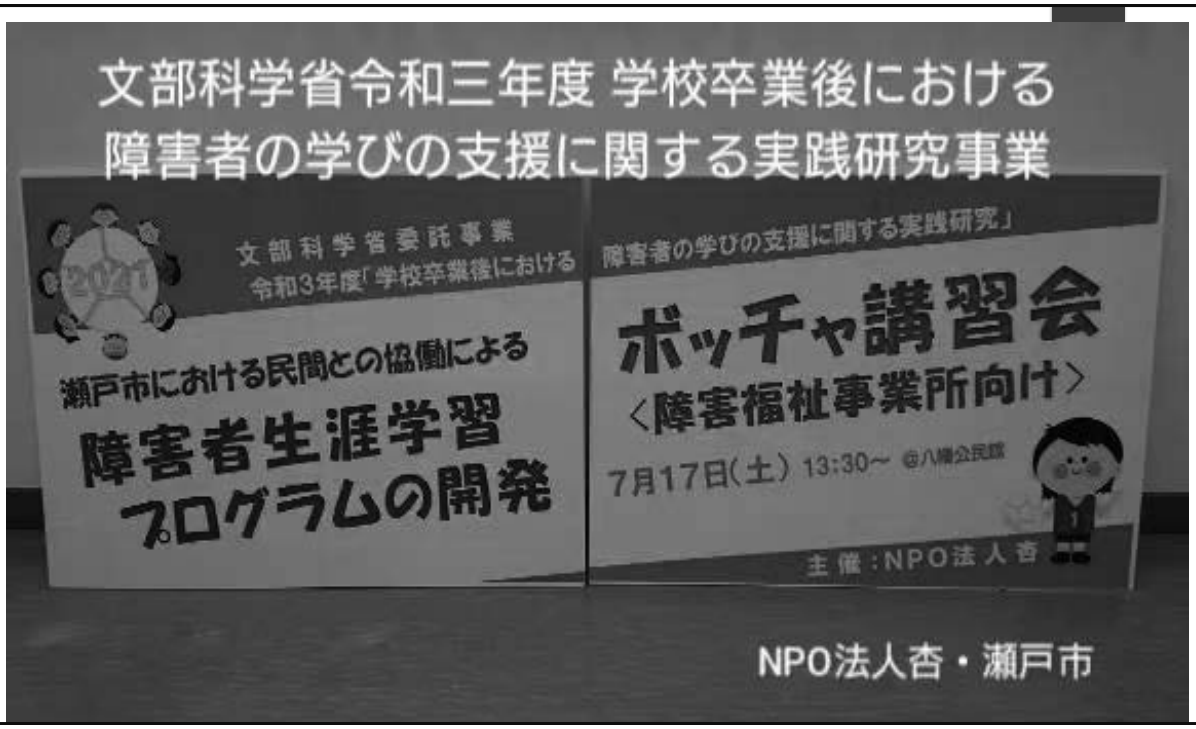
- 「瀬戸ボッチャクラブ」
- 肢体不自由の市立特別支援学校　瀬戸市立瀬戸特別支援学校（通称：さくらんぼ学園）から独立した組織
- 子どもから高齢者、同年齢や異年齢などの相互理解や人間関係の育成、向上に寄与することを目的として設立。
- 瀬戸特別支援学校の在校生や卒業生の自立と社会参加の場として、また生涯に渡り、ボッチャを通して交流を深められるよう、瀬戸市内の小学校、中学校、高等学校や地域の方々の協力を得て活動。
- 毎年「ボッチャ大会」が行われている。

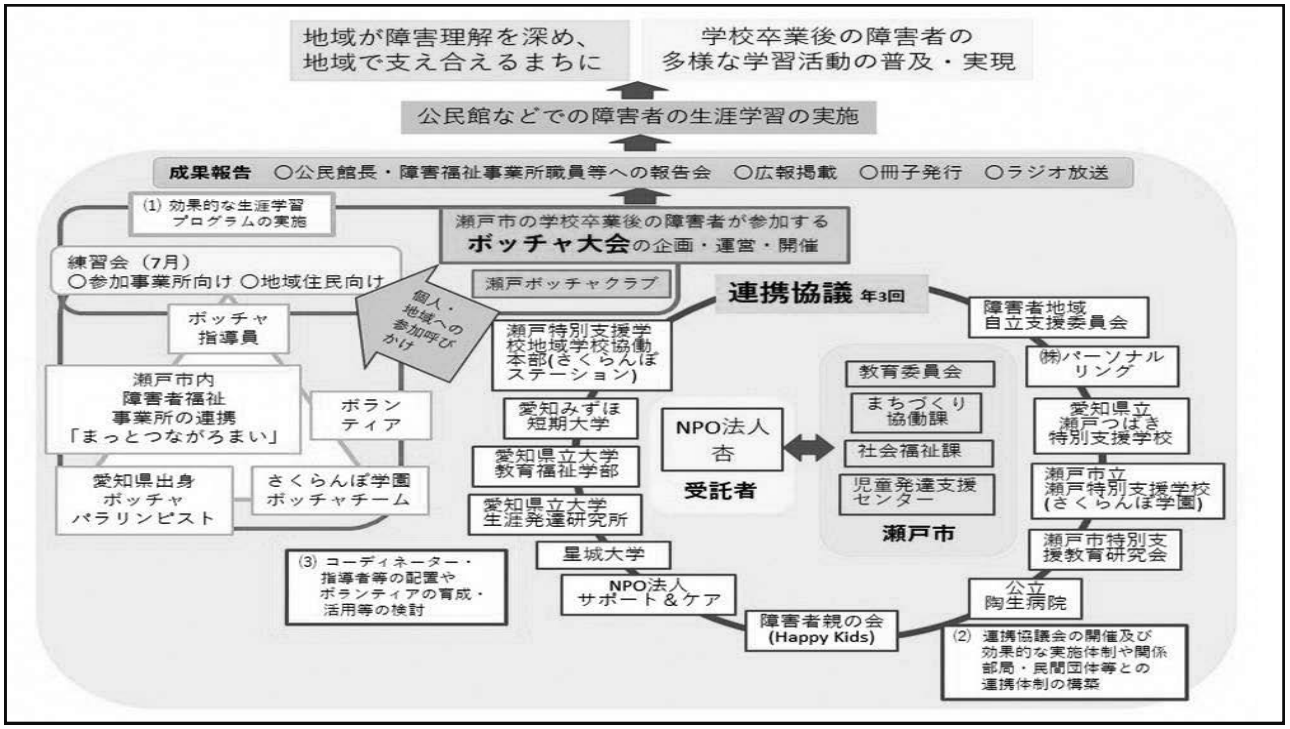
ボッチャを柱とした実際の取り組み



ボッチャ大会に向けて
「ボッチャ講習会」

	障害福祉事業所向け	地域向け
主な目的	・本委託事業の周知。 ・ボッチャ大会に向けた練習の機会を提供。 ・障害者本人の新たな趣味の獲得や、ボッチャ経験者の発掘、意欲や能力の向上等に繋げる。 ・自事業所以外の人と交流し、仲間の輪を広げる。	・本委託事業の周知。 ・ボッチャの周知。 ・地域と障害者を繋ぐ。
日時	7月17日（土）13：30~16：00	7月24日（土）13：30~16：00
場所	八幡公民館	
対象者	障害福祉事業所の利用者および事業所職員	公民館職員および地域の障害者
参加人数	25人 （障害福祉事業所の利用者18人+事業所職員7人）	19人 （公民館職員11人+地域の障害者青年6人+地域コーディネーター2人）





ボッチャ大会

日時：令和3年10月23日（土）午前中

場所：萩山小学校体育館

瀬戸特別支援学校教室（リモート観戦用）

参加チーム：瀬戸特別支援学校　2チーム　12人
瀬戸北総合高等学校　1チーム　4人
障害福祉事業所から
杏　1チーム4人
らいむ畑　1チーム　4人
ジョブスタイル　2チーム　8人
親の会Happy Kids　1チーム　3人

合計
8チーム
35人

ボッチャ大会
運営補助としての関わり

▶萩山公民館　八幡公民館　原山公民館　合計　12人

<コート補助係>

対戦表・得点板表示
ボールの回収
結果表記入
試合間のコートのモップがけ
ボールの消毒の補助

自然に障害のある人と関わる

障害者の生涯学習考えるきっかけ

ボッチャ大会
試合の様子

▶優勝チームは、受託先のNPO法人杏チーム！！
▶決勝は、唯一の健常者チーム瀬戸北総合高校との戦い
▶試合の途中には、瀬戸市長の応援も

運営も含めた参加者みんなが、ボッチャの楽しさを存分に味わうことができ、心温まる大会に

文部科学省令和三年度委託事業
学校卒業後における障害者学びの支援に関する実践研究事業

「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」

NPO法人杏/瀬戸市・瀬戸市教育委員会

これからについて

- アンケート結果や連携協議会委員、関わってくださった方々の意見などから、効果や課題を抽出・分析し、次への取り組みに活かす
- 障害当事者の意見や希望を考慮
- 連携・協働できる団体等の発掘
- 連携協議会委員とともに、地域に向けて本事業の重要性を発信し、地域が主体となって取り組むことができる仕組みを推進
- 連携協議会に様々な団体が携わっていることから、新たな分野での連携が可能に。繋がりを活用し、各団体で行われる事業に、それぞれの視点を取り入れた事業の展開を期待

これからについて

▶ 現在、地域の公民館等では様々な生涯学習が実施されているが、全国的にみても、障害者への視点が欠けている。まずはボッチャを普及することにより、

▶　　各公民館がボッチャ大会への参加

▶　　公民館でボッチャ講座等の実施

▶　　ボッチャに限らず障害者の視点に立った生涯学習の実施

→　障害者が参加しやすくなるような体制整備が図られるよう推進

▶ 地域団体、大学、企業なども含めた地域全体で障害者を支える仕組みづくりを推進し、その中で、障害者本人が意見や希望を述べ、本人が望む分野の講座の開設、学びの場の創出を検討

目指す将来像

障害者にとって学校卒業後、企業・福祉事業所等と自宅の行き来だけでなく、地域に開かれた様々な居場所での学びが生活の一部となる

共に学び、共に生きる共生社会の実現

【ボッチャ大会に参加して・参加者の報告】

　事務局であり、連携協議会副委員長を務めています林ともみと申します。
司会業ということもあり、成果報告会でも司会をさせていただきました。
また障害がある娘は障害福祉サービス事業所　らいむ畑に通所しており、娘もボッチャ講習会、ボッチャ大会にも参加させていただきました。
初めは「ボッチャ！？できるのかな？」と思いましたが、できないながらも一生懸命に取り組み楽しむ様子を見ていて、親としても嬉しかったです。

成果報告会では、参加した障害福祉事業所３チーム（NPO 法人杏・らいむ畑・ジョブスタイル）から、選手が一人ずつ参加してくれて、インタビュー形式で感想を述べて下さいました。

とくに打ち合わせはしなかったのですが、みんなしっかりと答えてくれて楽しかった様子が伝わってきました。

講習会を行ったことで「優勝するんだ」と意欲に燃えて、頑張ったこと。
優勝して嬉しかったこと。
ボッチャを今後もやりたいという思いも伝わりました。

そして、ボッチャだけでなく、もっともっとやりたいことがあり、仕事だけでなく、仲間と余暇活動を楽しみたいという思いも伝わってきました。

ダンスが好きな A さんは、仲間と保護者でダンスチームを作って踊っています。大好きなダンスを、もっとたくさんの人に広めて繋がりたいという思いもあります。お話を聞き、得意なことを仲間に教えて共有するのもいいなあと感じました。

はにかみながらＢさんは、
「歌が好き」と答えてくれました。無茶ぶりではありましたが「何かうたってください」と言ったら、
「となりのトトロ」と「さんぽ」をメロディーでうたって下さいました。
これには私も胸が熱くなりました。

「年（とし）だから・・・」と遠慮がちなＣさん。それでも、「そんな場所があれば･･･仲間がいれば･･･。」といいことを言って下さいました。
Ｃさんの発言は、とても的を得ていると思いました。

障害がある方々が、自分で場所を見つけて自分から飛び込んでいくのは、なかなか難しいと思います。
でも、誰かが場所を作って参加者に声がけをする、そんな機会があれば「参加してみよう」というきっかけになるのではないかと、Ｃさんの言葉で気づきを得ました。

その後の職員さんの報告でも、インタビューもさせていただきました。

どの事業所でも、講習会後に練習をしてくれていたようで、大会を楽しみにしてくれていました。仲間同士、声がけをしたり、話し合ったりするようになり、また少しずつボールの投げ方が上手になったという成長もみられたようです。
ルールが理解できない、勝ち負けがよく分からないという人も、もちろんいますが、でも、楽しくみんなで参加できたことは良かったと感じて下さったようです。
経験を積むということは、障害がある、なしに関わらず、大切なことだと改めて感じることができた時間でした。

ボッチャ講習会および大会報告書

所属・名前 （ 障がい福祉サービス事業所 らいむ畑　　渡邉由夏　池田隆浩）

・受付での配慮や待機する教室で大会の様子が見られたこと、スタッフの方の誘導等よく準備されていて、感染対策をしながらスムーズに運営してくださり安心して参加できました。
・ボッチャの試合もルールをある程度柔軟に対応してくださっていて参加しやすかったです
・一般の高校生の方と試合をしてみて、力の差はありましたが、このように対等にスポーツができるのはボッチャならではで良い機会だと思いました。
・このように普段関わることの少ない方々との交流の場でもあるので、少しお互いを知り合う時間（例えば、チームメンバーの紹介や試合の感想を伝え合う）があってもよかったかもしれないです。
・この大会を少し意識しながら、普段のレクリエーション活動でボッチャをやってきて球を投げるまでに長い時間がかかっていた利用者さんが経験を重ねてスムーズに投げられるようになり、楽しみの１つになったのかなと嬉しかったです。
・事業所以外の場所で会う機会がほとんどないため、今回のような機会を通して利用者さん同士新鮮な気持ちを感じたのではないでしょうか。
・毎月のレクリエーション活動中で、ボッチャを取り入れていますが、明確なルールがあるわけでもなく、また目標のようなものの設定も無かったので、１つの目標として「大会に参加する」といった目的設定にできたことはよかったと思います。
・勝負的な意味合いは理解することが難しい利用者さんが多いのですが楽しい時間を共有する機会が持てたと思います。
・大会の流れがスムーズで利用者さんに対してとても配慮がなされていると感じました。

ボッチャ講習会および大会報告書

所属・名前 （　ジョブスタイル・久保田薫　）

・ボッチャ講習会に参加し、実際に体験し講習会の終わりには「楽しかった」と言う利用者さんからの声が多くありました。

・ボッチャ大会に参加する前に余暇活動にてボッチャを施設内にて行いました。その際も講習会に参加した方はもちろん、それ以外の利用者さん達も一緒にボッチャを楽しみました。

・始めは球を投げると力の加減が分からずジャックボールに近づける事が難しい方やルールが分からず、ただ投げている方もみえましたが講習会に参加された利用者さん達が教えあい声掛けし楽しくプレイしているうちに、皆さん上手にできるようになっていました。

・大会では、スタイルは A.B と 2 チームで参加し、皆さん緊張されていたようで練習時のようなプレイができず、結果が上手く出せませんでした。
とても悔しがってみえました。

・大会後も「またボッチャやりたいです」と言う声が多く、今後もボッチャの取り組みを続けて行きたいと思います。

ボッチャ講習会および大会報告書

所属･名前　（ 障がい者支援センター 杏　　相馬貴久）

始はスタッフが練習しようかと言っていましたが、試合の一か月くらい前から自分たちから練習していいですか？と言うようになり、昼休憩に毎日練習するようになりました。試合の前よりも終わった今の方が熱心でいまだに毎日昼休みはボッチャの練習です。

以前より決断力が出てきて会話をしなかった利用者同士でも相談しあったり、以前よりも会話が増えた気がします。今までなかなか皆とコミュニケーションが取れなかった子が皆と仲良く話が出来、施設の雰囲気も変わった気がします。今度はいつ試合するのと聞いてくる子もいます。また優勝するからとやる気満々です。

文部科学省事業 令和3年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」成果報告会

［講演］

障がい者が学び続けるということ

–生涯学習を権利として–

日時　　2021年12月14日（火）　13:30～
場所　　瀬戸市デジタルリサーチパークセンター

田中 良三
（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授）

Ⅰ “第一の学び”を拓く

1970年代前半
障害児の不就学をなくす県民運動（愛知）

1972年　愛知県障害児に不就学をなくす会結成
（1974年～　愛知県障害児の保育と教育をすすめる会）

“ぼくもわたしも 学校行きたい 友だちがほしい”
地域日曜学校づくり運動

↓

1979年度養護学校教育義務制実施

Ⅱ “第二の学び”を拓く

1985年～　高等部希望者全入運動（愛知）

ー後期中等教育をどの子にも ー

”15の春を泣かせない“

＜4つの格差の克服＞

1. 障害の程度による格差
2. 障害の種別による格差
3. 都道府県による格差
4. 学校による格差

Ⅲ “第三の学び”を拓く

① 2004年　高等部の教育年限延長を目指す専攻科づくり運動

“もっと勉強したい”

② 2013年　知的・発達障害児の“大学” 見晴台学園大学の開校

③ 2017年　文部科学省による障害者生涯学習支援政策

Ⅲ“第三の学び”を拓く

① 2000年代前半～
高等部専攻科づくり運動

2004年　全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会の発足

“もっと勉強したい”

（前史） 1990年4月　発達障害児の5年制無認可高校見晴台学園開校（名古屋）

「学校型専攻科」と「福祉型専攻科」

☆学校型専攻科----私立特別支援学校に設置。国立に一校。公立はゼロ。
☆福祉型専攻科----障害者福祉の自立訓練事業や就労移行支援事業を活用。全国で増え続けている。

Ⅲ“第三の学び”を拓く

② 2013年　法定外見晴台学園大学の開校

新しい大学の幕開け

1. 国民の大学教育を受ける権利の保障 ～憲法 26 条の拡充と普遍化～

憲法 26条は「すべて国民はその能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と述べています。ここでは、「能力に応じて」をどう捉えるかということが大きな課題でした。わが国の民主的・科学的な国民教育運動は、これを「発達の必要に応じて」という風に無差別平等の原則に立ってとらえ、国民の権利としての教育を打ち立ててきました。それから４０年を経て、この教育における正義の原則が、見晴台学園大学の開校をもって、大学教育として初めて実現をめざすことになります。新たな大学＝インクルーシブな大学づくり、大学教育元年の幕開けです。

2. 発達障がい学生が学び甲斐のある学習支援の探求

いま、大学では発達障がい学生の支援が大きな課題になっています。しかし、対症療法で果たして彼らは本当に救われるでしょうか。大学そのものが変わらなければならないのではないでしょうか。

3. 「学びたい」と願うすべての人に開かれた大学教育の創造

経済的不平等と能力主義に立つわが国の大学教育改革を図り、学びたい人が自由に学べる無償制開放性を原則とする質の高い大学教育を追求します。

Ⅲ“第三の学び”を拓く

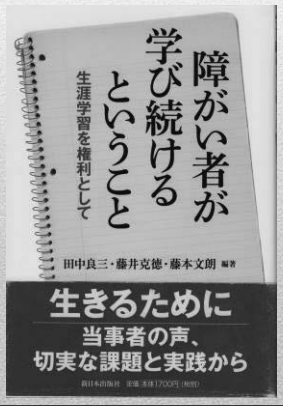
（Aさん）
「２年間は早いなと思いました。毎日、大学に行って講義を受けて、忙しくて一日が終わるとホッとしました。大学の講義でたくさんの情報をみんなと共有して、自分はみんな同じようにやってきたと思います。学年が上がって難しい講義が多くなりました。レポートを期限までに出すことや評価票のまとめは学生にしか味わえない最大の魅力です。---誰かに助けてもらうのではなく、自分でやる姿勢がないと行けないと思います。明日に備えて講義に向き合うことが大事だと学びました。---これから大学を卒業して働きたいと思います。この二年間、大学でいろいろな講義を受けて心が鍛えられました。そして、働く決心がつきました。」

（Hくん）
「２年間という短い時間だったが、充実した大学生活が送れてとても満足しています。講義などで学んで知らなかったことが解るという事は楽しいと実感しました。その中で普段、学生センターで仲間と一緒に過ごす時間が楽しかったです。いろんな人たちと喋っていると自分が興味ないことも『そうなんだ。』と理解していろんな話題についていけることが良かったと思います。毎日の大学生活は、すごく刺激に溢れていました。そして、今、大学を卒業して働こうと思いはじめました。学びは、就職しても自分で時間を作り自主的に続けたいと思い、働きながら音楽を学べる場所へ通いたいと思います。」

Ⅲ“第三の学び”を拓く

③ 2017年　文部科学省、障害者生涯学習政策を開始

文科省が障害者の生涯学習政策に着手する以前に、
私たちの手で取り組みを始めていた！



（2016年3月）、新日本出版

2016年4月　全国障がい者生涯学習支援研究会の設立

＜設立趣旨＞

障がい児は、今日、希望すれば誰もが特別支援学校の高等部まで行けるようになりましたが、学校卒業後は、一般就労しても職場で友だちもなく、地域でも一人ぼっちで過ごしていることが少なくありません。このような姿を見かね、かつての担任教師などが、障がい者青年学級などを開き、当事者を励ますとともに、その生涯にわたる学びの大切さを訴えてきました。

しかし、それは必ずしも、関係者の大きな声や要求とまではなってきませんでした。ここにあらためて、「障がい者権利条約」に学び、これまで全国のあちこちで長年にわたって多様に取り組まれてきた貴重な実践的努力を障がい者の権利としての生涯学習として捉え直し、今後さらに広げていきたいという願いのもとに、『障がい者が学び続けるということ～生涯学習を権利として～』（田中良三・藤井克徳・藤本文朗編著、新日本出版社、2016年3月）を出版しました。

執筆者からは、これを機会に、ぜひ研究会をつくろうという声が沸き、2016年4月17日に名古屋で「出版記念の集い」を持ちました。21名の参加者はそれぞれが熱い思いを語り合い、絆を強め、これから広くみなさんに呼びかけて取り組んでいこうと、「全国障がい者生涯学習支援研究会」（仮称）準備会を発足させました。

多くのみなさんに、ぜひ会員となっていただき、お互いに励まし合って取り組んでいきましょう。

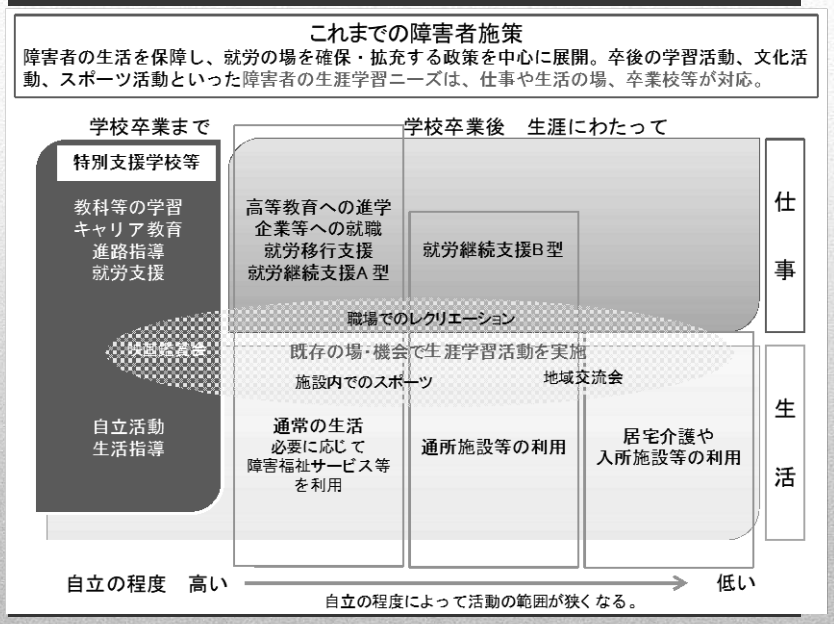
2016年4月17日

③ 2017年～
文部科学省による障害者生涯学習支援政策

2016年12月14日
「障がい者支援の総合的な推進に関する大臣講話」（松野博一文部科学大臣）
2016年12月14日
「文部科学省が所管する分野における障がい者施策の意識改革と抜本的な拡充～学校教育政策から「生涯学習」政策へ一」
（特別支援総合プロジェクトタスクフォース）
2018年～
「学校卒業後の障害者の学びの支援に関する実践研究」委託事業の開始

2019年3月
文部科学省・有識者会議報告書

2019年度～
全国をブロックに分けて、コンファレンスを実施



今後の障害者施策

従来の学校教育政策を中心とする障害者政策に留まらず、生涯学習を通じた生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりを推進し、「障害者の自己実現を目指す生涯学習政策」を総合的に展開。

学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業

令和3年度予算額（案）　116百万円
（前年度予算額　116百万円）

文部科学省

趣　旨

平成２６年の障害者権利条約の批准や平成２８年の障害者差別解消法の施行等も踏まえ、学校卒業後の障害者が生涯を通じて学び続けられる社会、共に学び、生きる共生社会の実現に向けた取組を推進することが急務。

学校卒業後の障害者の社会参加・活躍を推進するため、これまでの民間団体主体の実践研究の成果の活用・横展開を図り、都道府県を中心とした地域コンソーシアム形成による持続可能な生涯学習支援体制を構築し、併せて、新たに市区町村の社会教育施設等を主な実施主体とした生涯学習プログラムを開発・実施し、多様な学びの場の拡充に取り組む。そのうえで、実践研究事業等の成果の普及・活用や実践交流等のためのブロック別コンファレンス、障害理解促進に向けた啓発フォーラム等を実施する。

さらに、今般のコロナ禍において、学校卒業後の障害者が健常者と同様の学びの機会を得るために、よりきめ細かな支援が必要。

事業内容

１．地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究〔85百万円〕

（１）地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築〔43百万〕

都道府県と大学等との連携による体制整備・人材育成（5箇所）

◆**都道府県（政令市）が中心**となり、**大学や特別支援学校、社会福祉法人、地元企業等**が参画する障害者の生涯学習のための**「地域コンソーシアム」**を形成。

◆**学びの場の拡大**に向けて**市区町村職員向けの人材育成研修モデル**を開発・実証。

(1)都道府県レベルのネットワーク構築 ⇔ (2)市区町村レベルの学習機会拡充

（２）地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進〔38百万円〕※新規

市区町村による障害者を包摂する学習プログラムの開発（25箇所）

◆障害者の生涯学習のノウハウが乏しい市区町村が、実績のある民間団体等と組織的に連携し、主に公民館等の社会教育施設における、障害当事者のニーズや地域資源を踏まえた新たな「生涯学習プログラム」を開発・実施。その成果の普及・活用を目指す。

※現状・課題：現在の本取組の中心は民間団体が中心。H30年度調査では、障害者の学びの支援経験のない公民館等は85%超（右記グラフ参照）。

（３）取組の周知・普及・連絡協議会の開催〔4百万円〕

地域コンソーシアム等に取り組む地方公共団体等で構成される連絡協議会を開催する。

２．生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究〔3百万円〕

障害者が一般的な学習活動に参加する際の阻害要因や促進要因を踏まえ、読書バリアフリー法施行後の視覚障害者等の読書環境の整備に向けた課題把握や、コロナ禍における障害者の生涯学習の実態に関する調査研究を実施。

成果や課題を共有

３．障害者の学びに関する普及・啓発や人材育成に向けた取組〔28百万円〕

◆社会教育と特別支援教育、障害者福祉の各分野における**障害者の生涯学習推進の人材育成に関する有識者検討会を設置。**

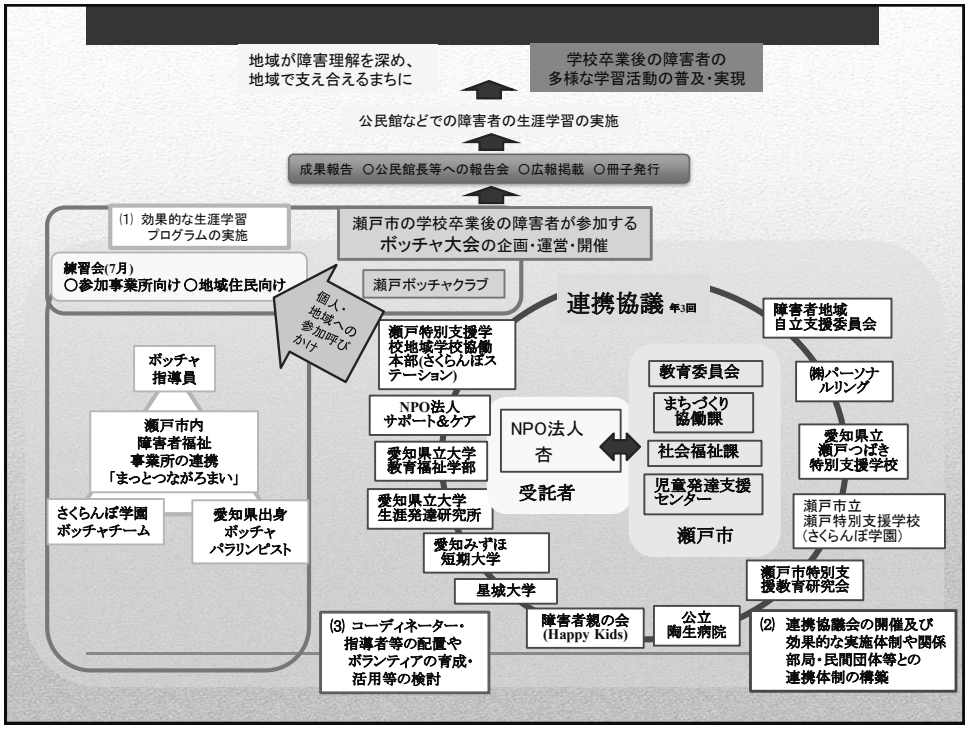
◆実践研究事業等により開発された「生涯学習プログラム」の成果普及や実践交流等を行うため、**全国をブロックに分けてコンファレンス（実践交流会）を実施。**

◆障害の理解促進や共生社会実現に向けて障害当事者の参画による**障害理解啓発フォーラム**の実施。

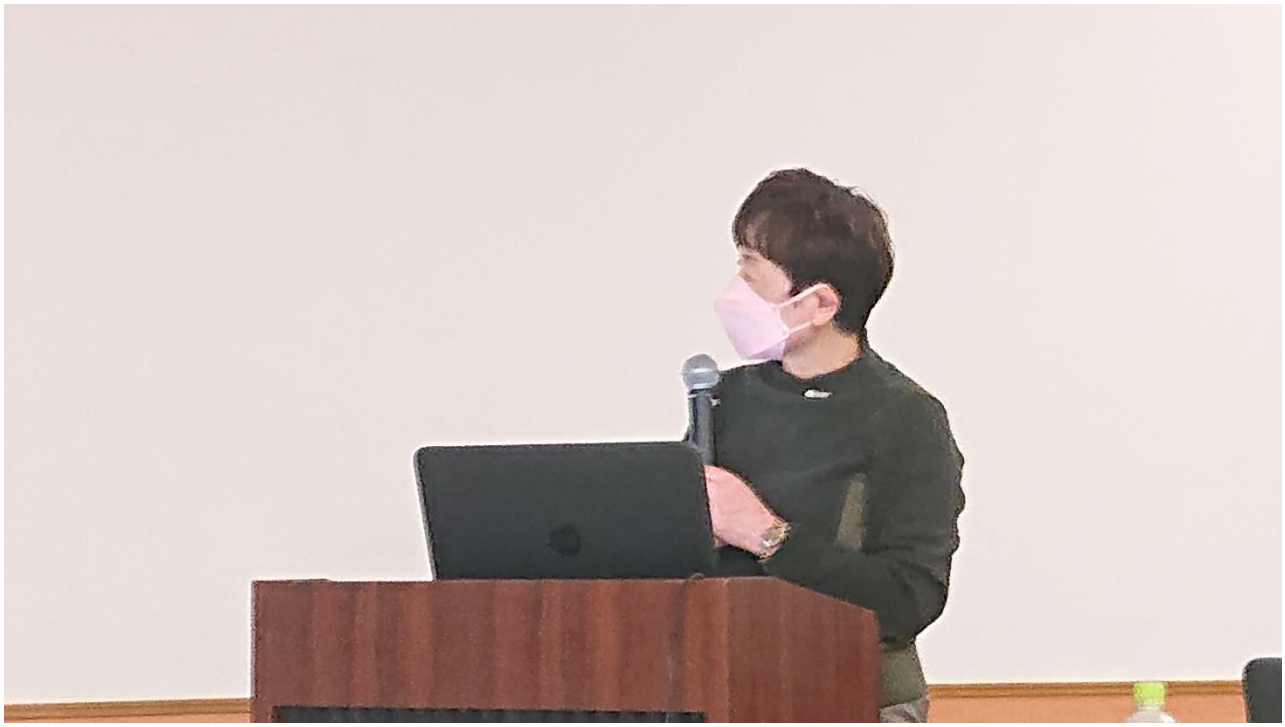
※写真：「超福祉の学校～障害をこえて共に学び、つくる共生社会フォーラム～」

期待される成果
◎**各地域で障害のある人の**社会参加と活躍を推進
◎**地域における**支援人材の増加と障害への理解を増進

目指す社会　◎**障害のあるなしに関わらず生きやすい**共生社会


地域が障害理解を深め、
地域で支え合えるまちに
学校卒業後の障害者の
多様な学習活動の普及・実現
公民館などでの障害者の生涯学習の実施
成果報告 ○公民館長等への報告会 ○広報掲載 ○冊子発行
(1) 効果的な生涯学習
プログラムの実施
瀬戸市の学校卒業後の障害者が参加する
ボッチャ大会の企画・運営・開催
練習会(7月)
○参加事業所向け ○地域住民向け
瀬戸ボッチャクラブ
個人・地域への参加呼びかけ
連携協議 年3回
障害者地域
自立支援委員会
瀬戸特別支援学
校地域学校協働
本部(さくらんぼス
テーション)
ボッチャ
指導員
瀬戸市内
障害者福祉
事業所の連携
「まっとつながろまい」
さくらんぼ学園
ボッチャチーム
愛知県出身
ボッチャ
パラリンピスト
NPO法人
サポート&ケア
愛知県立大学
教育福祉学部
愛知県立大学
生涯発達研究所
愛知みずほ
短期大学
星城大学
NPO法人
杏
受託者
教育委員会
まちづくり
協働課
社会福祉課
児童発達支援
センター
瀬戸市
(株)パーソナ
ルリング
愛知県立
瀬戸つばき
特別支援学校
瀬戸市立
瀬戸特別支援学校
(さくらんぼ学園)
瀬戸市特別支
援教育研究会
(3) コーディネーター・
指導者等の配置や
ボランティアの育成・
活用等の検討
障害者親の会
(Happy Kids)
公立
陶生病院
(2) 連携協議会の開催及び
効果的な実施体制や関係
部局・民間団体等との
連携体制の構築

令和3年度「地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究」
採択団体地域分布
(ア)地域コンソーシアムによる
障害者の生涯学習支援体制の構築
・北海道教育委員会
・秋田県教育委員会
・兵庫県教育委員会
・宮崎県
計４件(地図内：◎)
(イ)地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進
北海道・東北地方 ５件
関東甲信越地方 ６件
東海・北陸地方 ２件
近畿地方 ３件
中国・四国地方 １件
九州・沖縄地方 １件
計１８件
※括弧内は連携市区町村
・北海道岩見沢市
・北海道教育委員会
・秋田県大館市
・秋田県教育委員会
・株式会社日経ＢＰ(隆前高田市)
・特定非営利活動法人ボラリス(山元町)
・特定非営利活動法人
エイブル・アート・ジャパン（仙台市）
・特定非営利活動法人杏（瀬戸市）
・NPO法人春日井子どもサポートKIDS COLOR(春日井市)
・兵庫県教育委員会
・東京都国分寺市教育委員会
・日本社会事業大学（清瀬市）
・公益財団法人こうべ市民福祉振興協会(神戸市)
・NPO法人障がい児・者の学びを保障する会
（練馬区）
・一般社団法人みんなの大学校（国分寺市）
・福岡市手をつなぐ育成会保護者会
（福岡市）
・NPO法人ピープルデザイン研究所（川崎市）
・神奈川県相模原市
・宮崎県
・天理大学（天理市）
・社会福祉法人一麦会（紀の川市）
・国立大学法人愛媛大学
（愛媛県／松山市／久万高原町）



「障がい者の青年学級」による学びの場づくり　　視察研修報告の様子

令和3年度　文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究」委託事業

「地域における障害者の生涯学習推進コンファレンス in 東海・北陸」

日時 令和4年1月22日(土) 開場 9:30

場所 文化フォーラム春日井視聴覚ホール
春日井市鳥居松町5-44
※駐車場に限りがありますので、できるだけ公共交通機関または乗り合わせでご来場ください。

参加費無料　参加申込締切日 1月20日

絵：春日井高等特別支援学校生徒

参加申込フォームのQRコード

オンライン参加の方

会場参加の方 定員160名

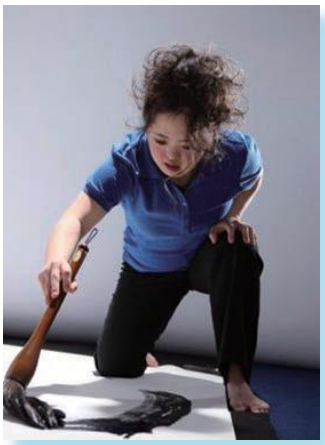
★オンラインで参加の方には事前にコンファレンスプログラム集を郵送いたします。
★会場で参加の方は当日お渡しします。

＜ 日　程 ＞

10:00　開会式
挨拶　実行委員長　伊藤 佐奈美(中部大学現代教育学部教授)
　　春日井市長　伊藤 太

10:15　趣旨説明
文部科学省・障害者学習支援推進室室長　清重 隆信

10:30　成果報告
愛知県瀬戸市の取り組み
① 「ボッチャ」を通しての学びの場づくり
② 「障がい者青年学級」による学びの場づくり(視察研修から)
愛知県春日井市の取り組み
① 障害者の生涯学習実践研究講座
　発表者　NPO法人春日井子どもサポートKIDS COLOR
　　理事長　志村 美和
② スポーツ講座
　発表者　1．FC.FERVOR指導者と参加青年
　　2．にこにこ北城クラブ指導者と参加青年



金澤 翔子さん
(書家・文部科学省スペシャルサポート大使)

12:00　＜昼　食　・　休　憩＞

13:00　記念公演　「共に学び共に生きる」
席上揮毫：金澤 翔子(書家、文部科学省スペシャルサポート大使)
講　　演：金澤 泰子(書家、東京芸術大学評議員)

14:30　事例報告と検討
コーディネーター：辻 浩(名古屋大学教授)　小林 洋司(日本福祉大学准教授)
① 「安心して学びあい共に育ち合う協働の取り組み」藪 一之(見晴台学園学園長)
② 「ゆめ、やりたいこと実現センターの取り組み」尾方 千春(和歌山・社会福祉法人一麦会・麦の郷)
③ 「障がい者青年学級と本人活動の会の取り組み」松田 泰幸（町田市とびたつ会支援者）

16:30　閉会

主催：NPO法人春日井子どもサポートKIDS COLOR／春日井市／春日井市教育委員会／文部科学省
共催：NPO法人杏／瀬戸市／瀬戸市教育委員会／春日井市社会福祉協議会
協力：愛知特別支援教育研究会／愛知県立春日台特別支援学校／愛知県立春日井高等特別支援学校／春日井市肢体不自由児・者父母の会
　　春日井市手をつなぐ育成会／春日井精神障害者家族会むつみ会
お問い合わせ先：090-4163-4365（志村）

令和3年度学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業
「瀬戸市における民間との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」

愛知県瀬戸市
「ボッチャ」を通しての学びの場づくり

令和４年1月22日（土）
地域における障害者の生涯学習推進コンファレンス　IN　東海・北陸
瀬戸市教育委員会　学校教育課　池田　有希

人　口：129，096人
面　積：111･40平方キロメートル

（令和3年4月1現在）

THE CITY OF CERAMICS
SETO, JAPAN

いいもん
せともん

日本遺産のまち
瀬戸市

愛知県瀬戸市は、名古屋市の北東約20㎞に位置し、森や里山に囲まれ、自然を身近に感じられるまちです。陶磁器の総称である「せともの」という言葉は、「瀬戸で作られたやきもの」が語源になったと言われており、良質で豊富な陶土に恵まれたこの地では、先人たちが新しい技術や文化を柔軟に取り入れ、「やきもののまち」を発展させてきました。長年受け継がれてきたやきものづくりの卓越した技は、多種多様なやきものづくりに繋がり、陶器と磁器が共存する稀有な産地であるだけでなく、ノベルティ（置物・装飾品）、ファインセラミックスなどが生産され、今も新しいものづくりが続けられています。先人たちより引き継がれてきた「歴史」「伝統」「文化」、そして豊かな「自然」が、今もなお、瀬戸の暮らしに息づいています。

また、2017年4月には、瀬戸市を含む日本六古窯の産地が提唱する「きっと恋する六古窯-日本生まれ日本育ちのやきもの産地-」のストーリーが日本遺産に認定されました。

文部科学省による公募　令和3年～

▶ 学校卒業後の障害者の社会参加・活躍を一層推進するため、市区町村が民間団体等と組織的に連携した生涯学習プログラムを開発・実施し、成果を全国に普及することを目的に「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」を公募

瀬戸市の障害福祉事業所　「NPO法人　杏」
就労継続支援Ｂ型　生活介護

ボッチャの取り組み

▶既に市内の学校で盛んに行われているボッチャ
▶地域においてボッチャができる場を整備し、学校卒業後も障害者が活動する機会の提供
▶地域住民がボッチャを通じて一緒になって活動できる場の整備
▶地域への障害理解を深める

ボッチャの取り組み

「瀬戸ボッチャクラブ」

- 肢体不自由の市立特別支援学校　瀬戸市立瀬戸特別支援学校（通称：さくらんぼ学園）から独立した組織
- 子どもから高齢者、同年齢や異年齢などの相互理解や人間関係の育成、向上に寄与することを目的として設立。
- 瀬戸特別支援学校の在校生や卒業生の自立と社会参加の場として、また生涯に渡り、ボッチャを通して交流を深められるよう、瀬戸市内の小学校、中学校、高等学校や地域の方々の協力を得て活動。
- 毎年「ボッチャ大会」が行われている。

ボッチャの取り組み

ボッチャ大会

学校卒業後の障害のある方が広く参加

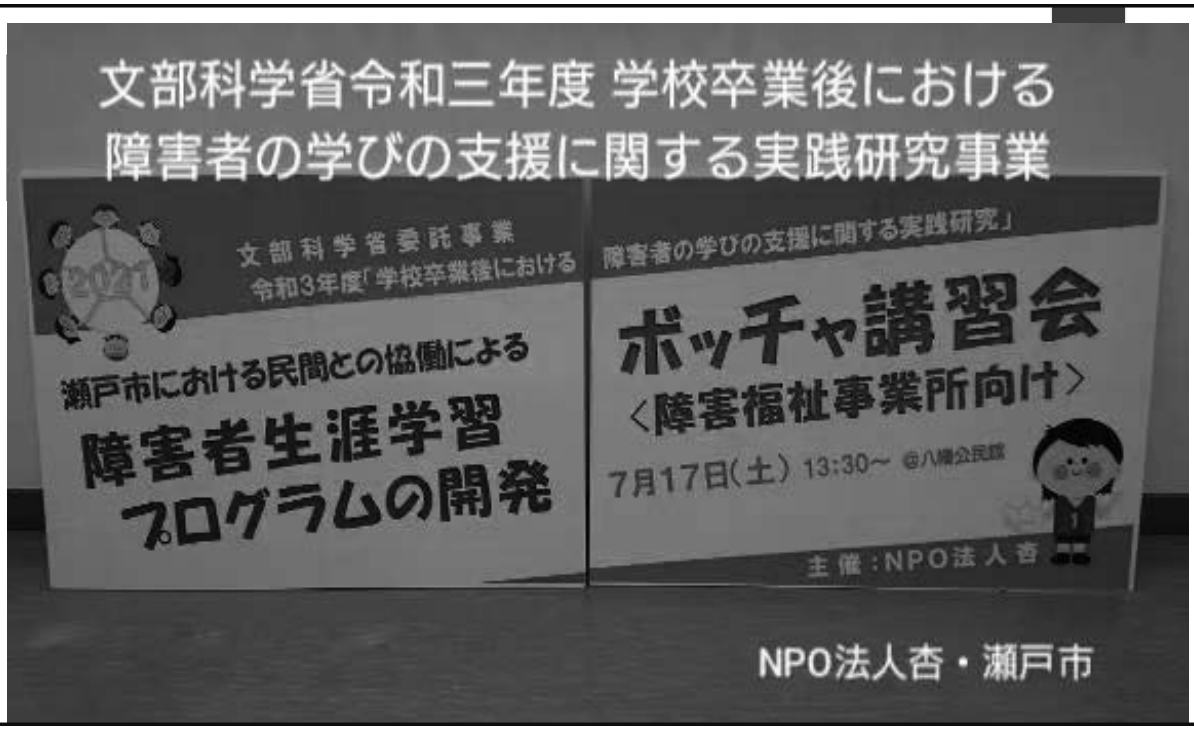
- ・障害福祉事業所
- ・障害者親の会

大会運営等に様々な立場の人が関わる

- ・公民館
- ・コミュニティ・スクール

ボッチャ大会に向けて
「ボッチャ講習会」

	障害福祉事業所向け	地域向け
主な目的	・本委託事業の周知。 ・ボッチャ大会に向けた練習の機会を提供。 ・障害者本人の新たな趣味の獲得や、ボッチャ経験者の発掘、意欲や能力の向上等に繋げる。 ・自事業所以外の人と交流し、仲間の輪を広げる。	・本委託事業の周知。 ・ボッチャの周知。 ・地域と障害者を繋ぐ。
日時	7月17日（土）13：30~16：00	7月24日（土）13：30~16：00
場所	八幡公民館	
対象者	障害福祉事業所の利用者および事業所職員	公民館職員および地域の障害者
参加人数	25人 （障害福祉事業所の利用者18人+事業所職員7人）	19人 （公民館職員11人+地域の障害者青年6人+地域コーディネーター2人）



ボッチャ大会

日時：令和3年10月23日（土）午前中
場所：萩山小学校体育館
　　瀬戸特別支援学校教室（リモート観戦用）

参加チーム：瀬戸特別支援学校　2チーム　12人
　　瀬戸北総合高等学校　1チーム　4人
　　障害福祉事業所から
　　　杏　1チーム4人
　　　らいむ畑　1チーム　4人
　　　ジョブスタイル　2チーム　8人
　　親の会Happy Kids　1チーム　3人

合計
8チーム
35人

ボッチャ大会
運営補助としての関わり

▶萩山公民館　八幡公民館　原山公民館　合計　12人

＜コート補助係＞
- 対戦表・得点板表示
- ボールの回収
- 結果表記入
- 試合間のコートのモップがけ
- ボールの消毒の補助

自然に障害のある人と関わる

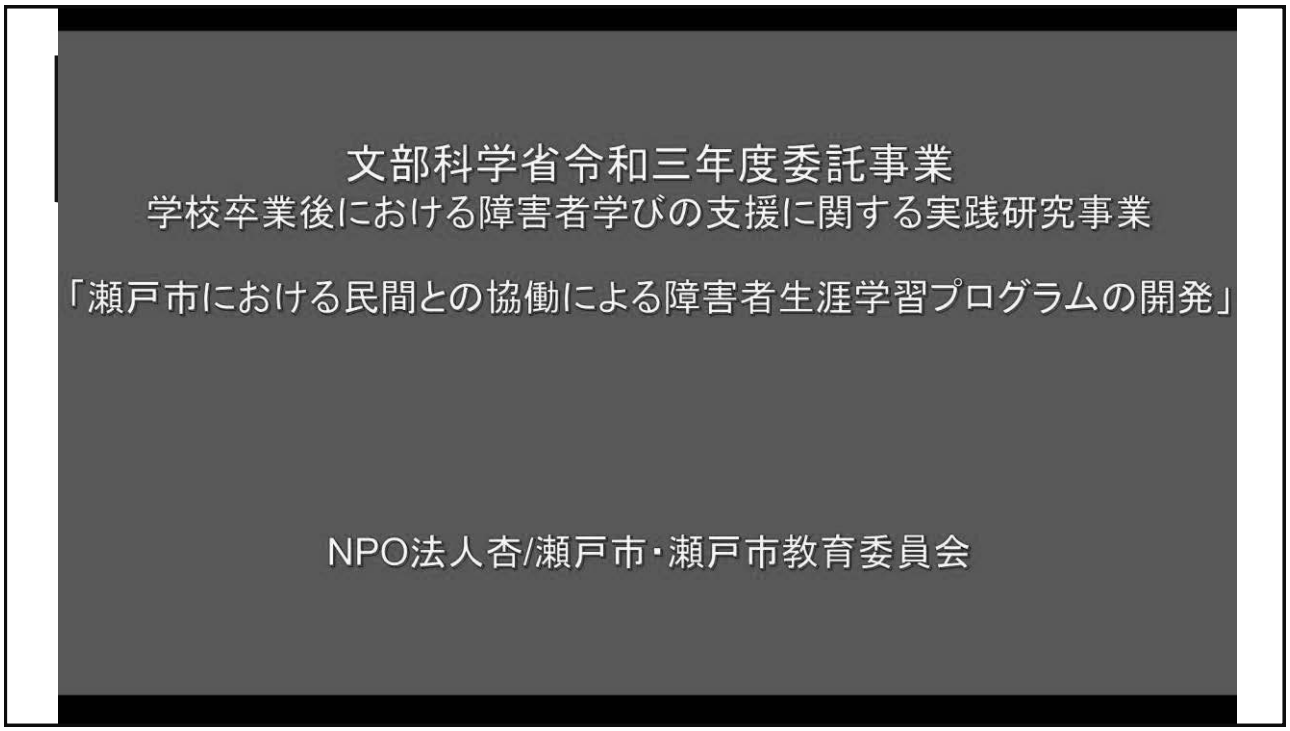
障害者の生涯学習考えるきっかけ

♪瀬戸特別支援学校コミュニティ・スクールの地域学校協働活動推進員も運営に関わる

ボッチャ大会
試合の様子

- ▶優勝チームは、受託先のNPO法人杏チーム！！
- ▶決勝は、唯一の健常者チーム瀬戸北総合高校との戦い
- ▶試合の途中には、瀬戸市長の応援も

運営も含めた参加者みんなが、
ボッチャの楽しさを存分に味わう
ことができ、心温まる大会に



成果報告会

障害青年自身による
ボッチャ大会参加の報告

- ▶ 優勝してうれしかったこと
- ▶ 大会に向けてみんなで練習して楽しかったこと
- ▶ ボッチャが好きになったこと
- ▶ 休みの日にいろんな人と関わりたい
- ▶ ボッチャの他に、ダンスがやりたい
- ▶ 歌が好きなので、みんなと歌を歌いたいと、
  好きな曲を歌いながら教えてくれた方もいた

主なプログラム

13：30	開会のあいさつ
13：40	学習プログラム成果報告 Ⅰ「ボッチャ」を通しての学びの場づくり2021 ・事業説明と経過報告 ・ボッチャ大会に参加して ・ボッチャ大会参加がもたらしたもの Ⅱ「障がい者の青年学級」による学びの場づくり　視察研修報告
15：00	講演「障がい者が学び続けるということ～生涯学習を権利として～」 田中良三（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授）

成果報告会の様子

成果と課題

- 行政と連携することにより、広く学校や公民館と関わりながら事業を展開することができた。
- 事業に参加した障害福祉事業所が余暇活動にボッチャを取り入れるなど、障害青年の新たな意欲や楽しみを創出する機会となり、継続的なボッチャの推進に繋がった。
- ボッチャ活動を検討している公民館があり、障害者の生涯学習の実施に至るきっかけ作りとなった。
- アンケートの結果の内容や成果報告会の参加者の少なさから、事業、特に障害者の学校卒業後の学び、生涯学習の必要性の周知啓発に課題があることが分かった。
- 連携協議会委員とともに、地域に向けて本事業の重要性を発信し、地域が主体となって取り組むことができる仕組みを推進

目指す将来像

障害者にとって学校卒業後、企業・福祉事業所等と自宅の行き来だけでなく、地域に開かれた様々な居場所での学びが生活の一部となる

共に学び、共に生きる共生社会の実現

視察研修会に参加して

加藤由美子
（NPO 法人るんるん保育所「善毎」園長）

町田市は駅に着くと想像より大きく都会でしかも「まちだ中央公民館」はなんと「レミィ町田」というビルの中にありました。

1974 年町田市障がい者青年学級は始まり、2004 年本人活動の会「とびたつ会」が実施され、町田市教育委員会生涯学習センター（まちだ中央公民館）の主催事業として現在 166 人の何らかの障がいをもつといわれる青年・成人が 70 人余りの有償ボランティアスタッフと月 2 回年間 16 回（5 月末～3 月初旬）程の活動でした、

「とびたつ会」とは青年学級（1974 年開始）から卒業し本人活動を主体的にという思いから、わずか 8 人でスタート青年学級を経験した人や直接「とびたつ会」に入会され、毎月第 2 第 4 日日曜日に活動されています。

視察当日、私たちが戸惑いながら公民館の受付で案内をしてもらっていると少し前に一階のエレベーターで見かけた車いすの方がにこやかに「こっちだよ」と声をかけてくださり、「愛知の方ですね。僕この前愛知に行きました。見晴台学園行ったよ」と嬉しそうに話され手招きするように会場に案内してくれました。素敵な笑顔で私たちの訪問を心待ちにされていたのか、会場に入ってからもずっとにこやかで、親しみを感じることができました。

会場の空気が、穏やかでこの「とびたつ会」に参加されている方々が、自主的な活動として自ら意欲的に取り組んでいることが感じられました。

午前中は自己紹介と会員の皆さんで作詞作曲された歌を交互にされ、司会者の方からマイクを受けとると自己紹介だけではなく、最近の近況報告もかねて話され、一人一人の表現の仕方は異なりますが誰もせかしたりせず 1 時間が過ぎました。かなり長い歌詞を皆さん最後まで歌われ、私は歌詞カードを見ながら何度も自分が感動しているのか涙があふれそうになるのを抑えていました。

生涯学習とはと、障がいがあるなしにかかわらず一生涯生きている間、余暇を楽しめることが大切と強く思えました。決められた枠の中で学校教育を終えて就労することは誰もが重要なことと認識し、小さな子どもの時代から大きくなったら働くことが大切と義務づけられています。就労してからも好きなことや興味のあることを楽しむことは、生きる上でとても大切なこと。余暇をいかに有意義に過ごすかで就労への意欲も高まると思えます。「とびたつ会」は月 2 回、仮に 1 回開催であったら、休めば次回までかなり期間が空き 2 回開催が重要とも思えました。リズムをとりながら自分たちで作詞作曲した歌を歌える楽しさ、歌詞も作り上げる時間が話し合いという気持ちを言語表現の場面になっていてさぞや楽しいだろうなとその場を思い浮かべました。

午後も休憩後、今後の活動への思いを参加者が思い思いに話し、時間があっという間に過ぎてしまいました。視察前に朝から夕方までこんなに長くどんな活動がされるのかと想像していた気持ちは全くの消え失せ、足らないくらいかと思えました。リードされる町田市役所の担当者が最後に次回の案内をされると参加者は満足そうに帰り支度、次回を楽しみにして解散され迎えの車、自分で

徒歩、電車、自転車でと帰えられました。

町田市役所という行政機関がかかわり青年学級という生涯学習の一環として実施されてきたことが重要なポイントであり、行政がかかわることで地域連携も実施しやすくなると、私は私自身がかかわってきた瀬戸市の「発達支援室」設置の実績を振り返りました。ぜひとも公的機関と民間機関とのつながりの橋渡しを今後も課題としていくことが大切と考えさせられ、今回の文部科学省委託事業に参加できたことが瀬戸市の生涯学習事業への障がい者参加の新たなきっかけになることで、行政が地域連携を真剣にとらえてもらえるように思いました。

５．総括 ～気づきの一年目をふりかえって～

令和 30 年度より始動した文部科学省「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」は過去三年間の成果を踏まえ、学校卒業後の障害者の社会参加・活躍を一層推進するため今年度より（１）地域における持続可能な学びの支援に関する実践研究 （ア）地域コンソーシアムによる障害者の生涯学習支援体制の構築、(イ) 地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進、(２) 生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究、の大きく三本の事業で展開されることとなった。私たち NPO 法人杏は(1)(イ)の地域連携による障害者の生涯学習機会の拡大促進に「瀬戸市における民間団体との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」をテーマに応募し、採択された。下記の囲みは公募の際に文部科学省から示された(1)(イ)の事業内容であるが、これに沿って①、②、④の三点について今年度の事業の成果を述べることとする。

市区町村が障害者の生涯学習支援に取り組むきっかけづくりのために、民間団体等と組織的に連携して、主に公民館や生涯学習センター等の社会教育施設における、障害者本人や各地域のニーズを踏まえた生涯学習プログラムを開発・実施し、その成果を普及・活用するために、以下の事項について実践的な研究等を行う。
① 効果的な生涯学習プログラムの実施
② 連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築
③ コーディネーター・指導者等の配置やボランティアの育成・活用等の検討
④ 成果等の普及
⑤ 広域的な研究成果普及･人材育成等を目的としたブロック別コンファレンスの実施(任意)
※①～④については必須事項、⑤については、選択事項とする。

① 効果的な生涯学習プログラムの実施

二回のボッチャ講習会と 10 月に行われた瀬戸ボッチャクラブ主催第 19 回ボッチャ大会への障がい青年の参加が今年度の学習プログラムの柱であった。企画準備に時間がない中で従来児童生徒を対象としていたボッチャ大会という地域資源を借りて学校卒業後の青年たちの活動を試験的に試みた形になったが、ここから私たちは大切な気づきを得ることができた。それはボッチャ講習会や大会に参加した青年たちが楽しそうに躍動する姿を通して垣間見えた本人たちの学習ニーズの存在である。文部科学省の政策に期待を込めて事業に参加した私たちだが、ボッチャ大会を目標に事業所での仕事の様子にも変化が見られたり、アンケートにはボッチャ以外にも仲間とやってみたい学習テーマがいくつも挙げられるなど当事者たちのニーズに直に触れたことで改めてこの事業に取り組む意義を確信できたと思う。

② 連携協議会の開催及び効果的な実施体制や関係部局・民間団体等との連携体制の構築

三回の連携協議会はコロナ禍を反映してオンラインでの開催を前提としたため、事業初年度

であるが受託者、事業主体者と協議会委員が一同に会する機会を持てなかったことは残念だった。協議会には瀬戸市の福祉行政・教育の担当者、特別支援学校、医療、親の会、大学教員など地域の多様な専門性のある方々に入って頂き、名古屋市の見晴台学園・見晴台学園大学と町田市の障がい青年学級ひかり学級、OB の青年学級とびたつ会への視察にも積極的に参加して頂いた。学校から社会への移行期の時期や学校卒業後生涯にわたって仲間とともに活き活きと学び、自分らしく過ごす姿を実際に体感することで本事業が目指す学校卒業後における学びの支援のイメージを具体的に膨らますことができたのではないかと思う。

また、今後の実施体制を構築するうえで瀬戸市の公民館に初年度から関わって頂けたことは大きい。どの公民館もこれまで障害者を対象とした講座や取り組みの経験はなかったが、私たちの呼びかけに応えてボッチャ講習会を瀬戸市八幡公民館で開催できたこと、ボッチャ大会にも複数の公民館長がボランティアとして参加したことなどを通じて障害者の生涯学習への関心を持つきっかけが作れたと思う。次年度以降、本事業への理解と問題意識を共有して連携を深め、公民館を活用した生涯学習の場の展開につなげていきたい。

③　成果等の普及

12 月 14 日の成果報告会と同じく愛知県で委託事業を受けた NPO 法人春日井子どもサポート KIDS COLOR・春日井市主催のコンファレンス(2022 年 1 月 22 日)において今年度の事業の成果報告を行った。また、NPO 法人杏の Facebook や瀬戸市ホームページにて事業の様子を紹介、地元 FM ラジオ・サンキューの番組で取り上げられるなど地域に向けた普及に取り組んだ。一方、コロナ禍のため地域の障害者や福祉事業所に向けた学習プログラムへの参加呼びかけを限定せざるを得なかったこともあり、瀬戸市で本事業に取り組んでいることや、国レベルで障害者の学校卒業後の学びの支援が生涯学習の視点から課題となっていること自体が当事者・保護者、教育、福祉関係者に情報としてまだ届けきれていないと思われる。

次年度は、情報発信と同時に本事業がめざす障害者の学校卒業後の学びの支援に対する理解と共感が得られるような普及方法について検討し取り組んでいきたい。

おわりに

事務局次長として NPO 法人杏、瀬戸市の皆さんと本事業に参加して一年、十分な助走期間もない中で「これは障害のある人と地域にとって必要なことだ」と大きな決断で取り組み始めた皆さんに敬意と感謝の意を表したい。実際に事業を進めるうちに事務局の私たち一人ひとりにもたくさんの気づきと学びがあり、それもやりがいにつながったと思う。地域に暮らす障害のある人の顔や名前がすぐに浮かぶ手の届く支援が大きな市町にはない瀬戸市の魅力だと感じているが、その良さを活かして学校卒業後の学びの支援を充実させるモデルを形にし、県内県外に広く発信していくことを強く期待している。

編集後記

文部科学省から委託を受けた本事業は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当初企画した内容を縮小せざるを得ませんでしたが、たくさんの方のご協力のおかげで、なんとか１年間のまとめである「報告集」を発行することできました。より多くの方に読んでいただけることを願っています。そして、それぞれのお立場で少しでも障害者の生涯学習について考えるきっかけになれば幸いです。

発刊にあたり、ご協力いただきましたすべての皆様に深く感謝申し上げます。

令和３年度文部科学省
「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」

「瀬戸市における民間団体との協働による障害者生涯学習プログラムの開発」　報告集

発行日　２０２２年３月１０日
発行者　ＮＰＯ法人　杏

問い合わせ先　瀬戸市役所まちづくり協働課協働第３係
〒４８９－００４４　瀬戸市栄町４５　パルティせと３階
電話：0561-97-1336
Ｅメール：machidukuri@city.seto.lg.jp